

第5章 手繰ヶ城山古墳の評価と意義

1. 手繰ヶ城山古墳の墳丘形態と規模

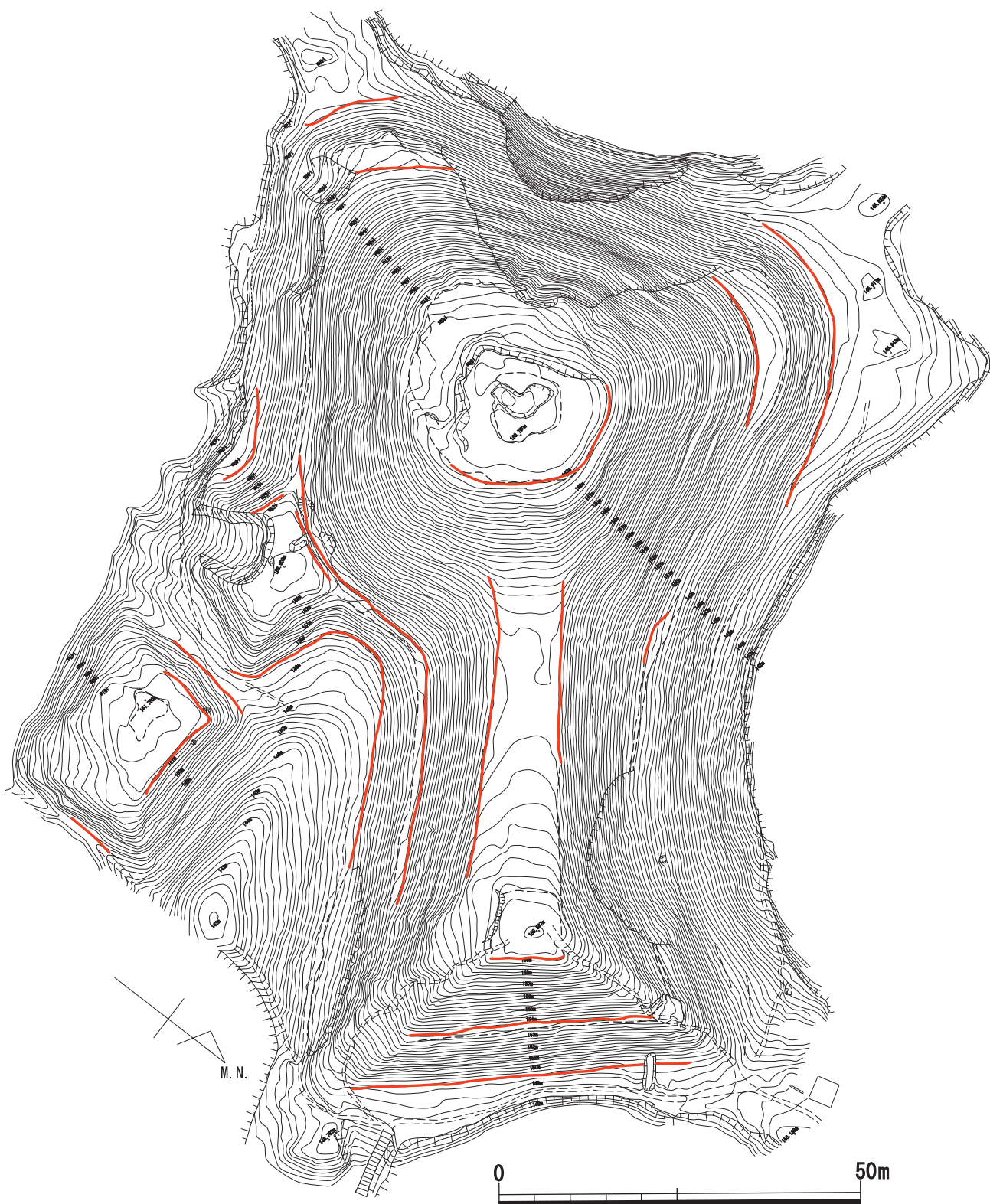
(1) 墳丘形態の解明のための定点

墳丘形態の解明にあたっては、はじめに墳丘の遺存状況が良好な箇所とそうでない箇所を正しく峻別することが重要であり、これについてはすでに第4章で各部の調査成果を詳しく述べた。墳丘が良好に遺存する箇所が明らかになったら、次にそこを定点とし、定点どうしを矛盾なくつないでいく。こうした作業によって、より高い精度で墳丘形態の解明をすすめていくことができる。墳丘の遺存状況が良好で、墳丘形態を復元する際の定点となる箇所をあらためて整理してみると、次のようになる（第11図）。

まず後円部については、後円部墳頂では、墳頂面の北側から東側にかけてのところ、標高162.500～163.000mの等高線に沿って弧を描きながら巡っている墳頂平坦面の端部が認められ、これが墳頂平坦面の定点となる。このラインよりも南側から西側にかけてのところには、直線的で矩形に屈曲する高さ1m弱の段や、崩落による影響などが見られ、またこの箇所では等高線も大きく乱れており、本来の墳頂面の姿が失われている可能性がきわめて高い。

後円部の北西側斜面は全体的に墳丘の遺存状況が良好である。具体的には、墳裾、1段目斜面および平坦面、2段目斜面が良好に遺存しており、墳丘形態の解明のための定点となる。南西側斜面についても、墳裾、1段目斜面および平坦面、2段目斜面が比較的良好に遺存しており、同じく墳丘形態の解明のための定点となる。ただし両地区とも、崩落の影響をうけている後円部西側（後円部背面）に近い箇所では、墳裾や1段目平坦面がやや不鮮明となっている。後円部北側は、北西側から続く墳裾がかるうじて残されているようである。造出と後円部との間には、1段目平坦面とつながる形で、弧状に溝が巡っている。この箇所と接する後円部南東側、そして南側くびれ部にかけての範囲は、この溝や1段目平坦面が、後円部2段目裾の形態を解明する際の定点となる。

一方、後円部の南側斜面は、今回の25cm間隔の等高線による作図化で、従来の測量図では表しきれなかった、微かな地形の起伏や等高線の歪みが表現されたことにより、2段目斜面には崩落の影響による等高線の乱れが広い範囲に認められ、また1段目斜面には崩落や山道による影響がやはり広範囲に及んでいるということが明らかにされた。とりわけ、1段目斜面下部のところでは、高さ1m程度の段差が上下に曲折しながら、約29mの長さで直線的に続いていく様子が観察された（傾斜変換線として細点線で表現した箇所）。福井大学考古学研究会による調査では、墳丘の遺存状況に関して多少疑念がもたれながらも、この段差の下端が墳裾と認識されて、後円部南西側の墳裾と一体的に結ばれた。その結果、この箇所から後円部南西側にかけては墳丘の形状が直線的になるものと理解され、現在に至っている。しかしながら、第4章第3節（32頁）で述べたとおり、この段差の下端は標高が一定せず、また後円部南西側の墳裾の標高とも齟齬をきたすこと、並行して山道が通っていること、すぐ外側には崖面が迫っていることなどから、今回の調査ではこの箇所においては墳裾が遺存している可能性は低いものと判断した。したがって、墳裾の形態を解明する際の定点とすることはできない。これは従来



第11図 墳裾および2段目裾、墳頂平坦面の遺存状況（縮尺1/800）

の見解とは異なる評価と言える。なお、造出の側面から後円部南東側にかけての箇所には、比較的幅広の平坦面を伴う形で墳裾が良好に遺存している。

くびれ部については、造出から南側くびれ部にかけては、墳裾、1段目斜面および平坦面、2段目斜面が良好に遺存しており、墳丘形態の解明のための定点となる。北側くびれ部は、標高150mの等高線のところに1段目平坦面が遺存し、また2段目斜面にかけて葺石が濃密に認められたが、1段目斜面から下は等高線の乱れが目立ち、葺石もまばらであった。やや低い位置に墳裾と推定される傾斜変換が見られたが、ゆるやかに外湾する程度で、南側のような明確なくびれ部の屈曲は認められなかった。

前方部については、まず前方部前面の遺存状況が良好である。ここでは、墳裾、1段目斜面および平坦面、2段目斜面が良好に遺存しており、墳丘形態の解明のための定点となる。墳裾に伴って幅広の平坦面が形成されているが、墳裾の約5m外側には丘陵崖面がせまっている。前方部の南側側面は、等高線の乱れや崩落の影響が見られる隅角寄りを除けば、墳裾、1段目斜面および平坦面、2段目斜面が良好に遺存しており、やはり墳丘形態の解明のための定点となる。隅角寄りの箇所では、1段目斜面下部の崩落の影響を受けて、墳裾はわずかながら外側へ膨らんでいるようである。これも従来の測量図からは読み取れなかった点である。前方部北側側面には、2段目斜面に大規模な崩落が見られる。等高線の状況などから、崩落は前方部上面にまで達しているものと判断される。1段目平坦面は部分的に残されているが、その幅は狭く、崩落の影響を受けている可能性がある。墳裾は、隅角寄りの箇所（標高147～148mの等高線の箇所）において傾斜変換が認められた以外には、その位置を正確につかむことはできなかった。後円部北側からくびれ部、そして前方部北側側面にかけては、墳裾のすぐ下まで丘陵崖につながる急斜面がせまっています、墳裾を見えにくくさせている。

前方部隅角は、北側・南側ともに、後世の改変による影響を受けて、稜線上が幅広化している。これらは「後世の人工的削平の跡」として、福井大学考古学研究会の調査でも報告されているが、今回の測量によって地形の起伏や等高線の歪みがさらに詳しく表現されることになった。またその結果、この箇所における墳丘斜面や1段目平坦面の残りはあまりよくないことが明らかになった。前方部隅角の墳裾は、現況では正確につかめなかったが、前方部前面と側面とにおける墳裾の関係や、等高線の状況から、南側はX点、北側は標高148.500～148.750mの等高線が巡るY点付近に、その位置を想定することが可能だろう。なお、X-Y点の中間地点をW点とする（第12図に表示）。

前方部上面は、南側端部は墳裾および1段目平坦面と並行し、隅角の方向へ開きながら伸びていく。これに対し、平野に面する北側端部は、前方部の中ほどから隅角にかけて、崩落による影響が迫り、平坦面端部の開きが直線的になる。前方部上面については、南側端部は当初の姿を比較的保っているのに対して、北側端部は中ほどから隅角にかけては崩落の影響を受けているものと考えられる。これも従来ほとんど強調されてこなかった点である。北側端部は、本来は南側と同様に、隅角の方向へ開き気味に伸びていくものと思われる。前方部墳頂には、前方部隆起斜道からせりあがったところに、約9×9.5m、高さ約0.5mの方形の高まりが認められる。主軸から北（平野）側に寄って見えるのは、この高まりの南東面が南側隅角から続いて損壊していることに起因する。

(2) 墳丘形態の復元と墳丘の規模

手繰ヶ城山古墳は、北、北西、南西、東へ派生する4つの小尾根が集まる丘陵頂部に、側面を九頭竜川が流れ込む平野側つまり北西側へ向けて築かれている。立地する丘陵頂部の地形的制約を強く受け、さらに山道や崩落などの影響で墳丘が変形し、そのため形態および規模はつかみにくく不確かな点もあるが、今回の測量を通しての現時点における評価を述べる。前節で挙げた定点をつなぎ各部の形態を復元するとともに、規模を計測すると次のようになる。

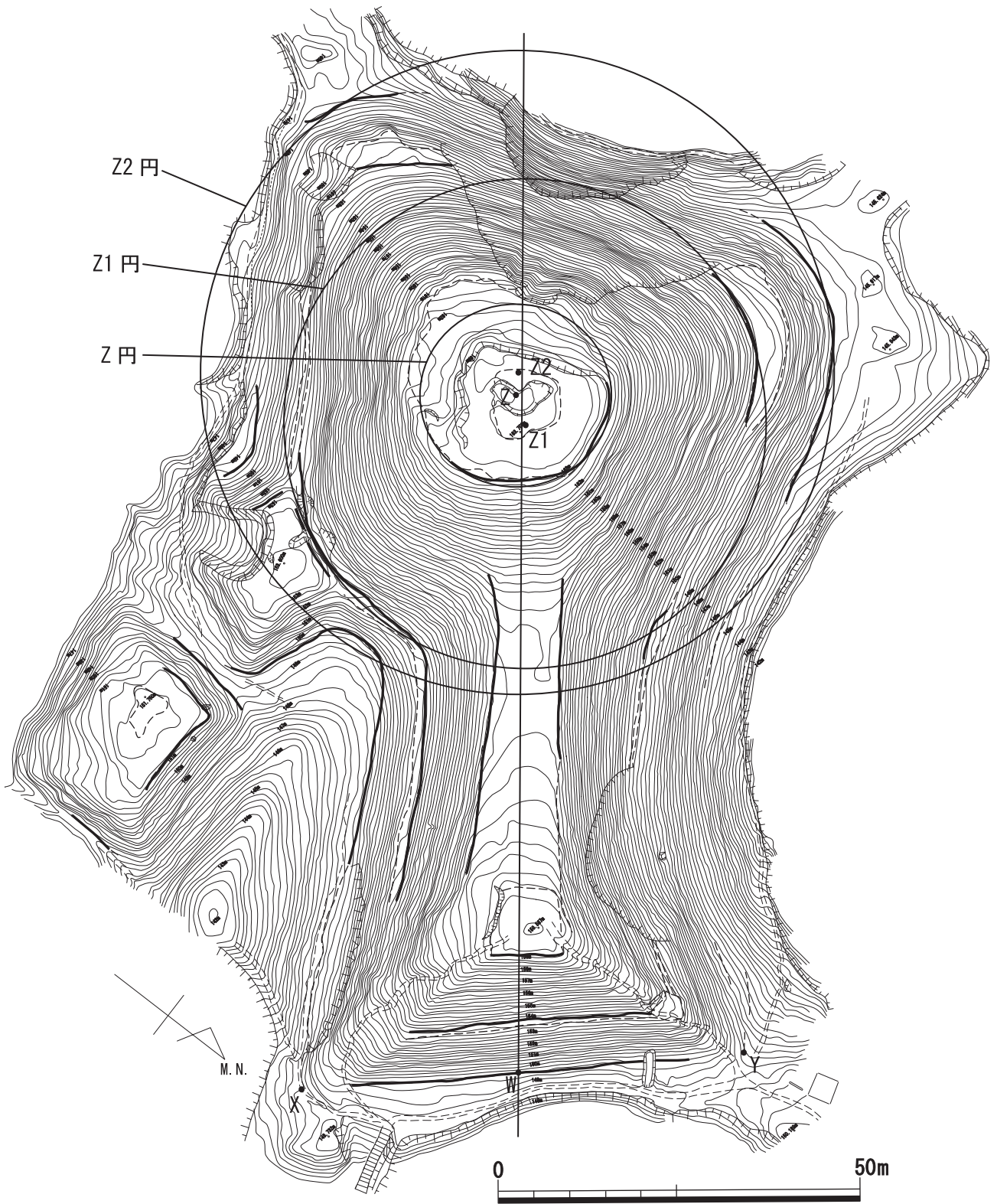
後円部の形状 後円部の中心を求めるため、墳頂平坦面端部線、2段目裾線（北西側斜面、南西側斜面、南側くびれ部から造出にかけて、北側くびれ部）、墳裾線（北西側斜面、南西側斜面、南側くびれ部から造出にかけて）の各定点を基準にして、後円部の中心を導く作業を行った。

まず、墳頂平坦面端部線にもっとも適合する整円を復元すると、第12図のようになる。この復元ラインは、前方部に面する北東側の箇所では墳頂平坦面端部線のやや外側を通るが、北西側から北側にかけてと東側ではうまく整合しており、ほぼ妥当であるとみなされる。復元ラインの直径は26mで、その中心点は現況の墳頂平坦面中央から南へ約2.5mいった、陥没痕の中の地点にくる（Z点）。ちなみにこの復元案が正しいならば、南南東側の標高162.500mの等高線辺りまでは、辛うじて墳頂平坦面の名残を留めているように見える。しかし、南側から西側では、2段目斜面にかけての広い範囲に損壊が及んでいることがあらためて認識される。

続いて、2段目裾線および墳裾線についても、もっとも適合する整円を復元すべく試みた。具体的に見ていくと、Z点から北へ4.4mの地点（Z1点）を中心とする2段目裾の復元ラインは、造出と後円部との間にある弧状の溝に沿い、そして南側くびれ部、北側くびれ部、北西側斜面の各定点を通るが、南西側斜面では定点の内側に大きく入ってしまう。そこで南西側斜面の定点を取り込むべく、これと対角の方向にある北側くびれ部の定点を基準に整円を描くと、今度はZ点に中心がくるが、北西側斜面の箇所では1段目平坦面端部の所へ、また造出墳頂を通して造出南面のくびれ部墳裾の所へというように、復元ラインが2段目裾線の定点を大きく越えてしまう結果になった（この復元ラインは表示していない）。このように、2段目裾線の各定点を同一の円周上に置くのは困難であるということが明らかになった。なお、北側くびれ部と北西側斜面の定点の間では、両案ともに復元ラインが1段目斜面にかかってしまい、ここでも整円による復元が適合できないことが確認された。

墳裾線の復元ラインは、Z点およびZ1点と中心点を共有せず、Z点から南西へ2.8mの地点（Z2点）に中心を置いてはじめて、北西側斜面、南西側斜面、そして造出くびれ部、南側くびれ部の各箇所を通る整円を描くことができる。またこの復元ラインは、北側くびれ部の位置とも大きく矛盾しない箇所を通過する。このとき復元ラインの直径は88mである。しかしながら、造出から後円部南東側斜面にかけては、復元ラインが定点の外側に大きく膨らんでしまい、うまく取り込むことができない。また、後円部背面（西側斜面）では、復元ラインが丘陵崖面を大きく越えてしまうという問題が発生する。このことは、2段目裾線と同じく墳裾線についても、各定点を同一の円周上に置くのは困難であることを示している。

したがって、2段目裾線および墳裾線については無理に整円を適合させて復元するのではなく、左右非対称な形状にはなるが、各定点の間は崩落や山道による影響を差し引きつつ、なる



第 12 図 墳裾線の復元ラインと墳丘主軸 (縮尺 1/800)



第 13 図 手線ヶ城山古墳墳丘復元図 (縮尺 1/800)

べく等高線の走向に沿わせて復元するのが妥当であるという結論に至った。

このようにして図化したものが第 13 図である。後円部背面側においては、墳丘は丘陵崖面の手前でおさまるから、この箇所における墳裾の形状は直線状またはわずかに弧状を呈する程度であったと考えられる。後円部北側の墳裾についても同様にわずかな弧を描きながら、北側くびれ部へつながるものとみられる。後円部南側の墳裾については、従前の測量図の不備を繰り返し指摘したが、かといって墳裾が丘陵崖面を大きく越えた位置を巡るとも考えられない。南西側ならびに造出南面くびれ部における墳裾から類推するならば、後円部南側の墳裾は従前の測量図とあまり変わらない、崖面の付近を巡っていたものとするのが妥当であろう。後円部墳裾の走向は部分的に直線状で、一見すると「後方部」のように見えるが、定点の箇所はいずれも丸みを帯びており、前方後方墳でないことは明らかである。丘陵頂部の限られた面積に 2 段築成の大型前方後円墳を築くため、墳丘形態を部分的に変形させているのである。

なお、1 段目平坦面は全体的に 0.5~1.5m 程の幅で巡っているが、後円部の北西側（最大幅 5.5m）と南西側（最大幅 4.5m）だけはかなり幅広となる。この 2 箇所には下方へ伸びる尾根との間に比較的広い平坦面が存在するのに対して、その他の箇所にはこうしたスペースがほとんど見られない。つまり、幅広の 1 段目平坦面を確保する地形的な余裕がそもそもないことになる。だがそれにしても、1 段目平坦面の幅が不揃いになってまでも、なぜこれほどまでに平坦面の幅を広くする必要があったのか、正確な理由は不明である。

前方部の形状 前節で示した定点を基準に、各定点の間は崩落や山道による影響と、等高線の走向を勘案しながら復元した。まず南側側面は、墳裾線、2 段目裾線ともに隅角へむかって直線的に開いていく様相が見てとれる。一方、北側側面については、丘陵斜面が墳丘まで迫っており、くびれ部と隅角の箇所を除くと、墳裾のありかは明確ではない。前方部の形態に関してはバチ型とする説があり（福井大学考古学研究会編 1978、河村 2001）、確かに湾曲する等高線が見られるが、これは丘陵地形の強い規制を受けているがための結果であり、必ずしも前方部形態の本質を表すものではないと考える。このように、前方部についても左右非対称な形状となっているが、やはり丘陵地形に強く規定されたことが大きな要因として考えられる。

前方部前面は主軸に対してやや斜交しているが、これは間近に迫る丘陵崖面の影響が墳丘へ及ばないようにしたためであろう。前方部前面の墳裾は、隅角の箇所と比べて、1~1.5m 程高い位置を巡っている。前方部前面の墳裾が現地表面から数十 cm 下に埋没していることを踏まえても、これは無視できない標高差と言えるだろう。それではどのような解釈が可能であろうか。前方部前面の墳裾を隅角の標高に合わせて構築するならば、さらに深く広い範囲を掘削しなければならないことに加えて、前方部前面の位置が丘陵崖面へより近づくことになってしまう。つまり、地形的な問題をなるべく回避するとともに、掘削の労力を省略しながらも、側面から見たときにできるだけ墳丘を高く見せるための構築上の工夫がなされたものと考えられる。

隅角に関しては、南側・北側ともに後世の改変による影響を受けて、稜線上が幅広化している。この点は従来から指摘されていたことではあるが、福井大学考古学研究会編 1978 による測量図では隅角の箇所にも矩形に屈曲する 1 段目平坦面が描かれ、前方部側面から前面にかけて 1 段目平坦面は途切れることなく連続するものとして把握されてきた。しかし今回の測量の結果、1 段目平坦面は隅角の箇所でも損壊しているものと判断した。1 段目平坦面は通例のよ

第 6 表 墳丘各部の標高

	後円部			くびれ部		前方部		
	北西側斜面	南西側斜面	南東側斜面	北側斜面	南側斜面	北側斜面	南側斜面	前面
2 段目	151.00～ 151.25	151.250 ～151.75	152.00～ 152.25	149.50～ 150.25	152.00～ 152.25	150.25～ 150.50	151.50～ 152.50	153.50～ 153.75
1 段目	146.00～ 146.25	147.250 ～147.75	148.50～ 149.50	145.00～ 145.25	149.75	147.50～ 148.00	147.75～ 149.25	149.25～ 149.75

第 7 表 墳丘各部の傾斜角度

	後円部			くびれ部		前方部		
	北西側斜面	南西側斜面	南東側斜面	北側斜面	南側斜面	北側斜面	南側斜面	前面
2 段目	30°	25～30°	30°	31°	25°	36°	32°	30°
1 段目 平坦面	13°	11°		18°	10°		18°	18°
1 段目	25～30°	20～30°	25～30°	30°	24～26°	25～30°	28°	32°

うに、本来は鋭角に屈曲して側面から前面を巡っていたものと判断される。

前方部上面の形状については従来あまり問題視されることがなかったが、左右非対称になっている。これは、2 段目斜面の崩落が前方部上面の北側端部にまで影響しているからであり、北側端部は南側端部と同じように本来は隅角上面へむかって開き気味に伸びていくものと考えられる。前方部墳頂には、現状で約 9×9.5m、高さ約 0.5m の方形の高まりが存在する。

立面の形状 各斜面における墳裾と 2 段目裾の標高、墳丘斜面の傾斜角度を示したものが第 6・7 表である。後円部の墳裾が同一の標高で巡っていないことはすでに述べたとおりで、北西側と南東側とでは最大で約 3m の標高差が生じている。同様にくびれ部では約 4.5m、前方部側面では約 1m の標高差がみられる。このように墳丘北側はより低い位置に墳裾が巡らされており、南側と比べて墳丘のつくりが高くなっている。これは九頭竜川が注ぐ福井平野に面する墳丘北側のつくりが重視されたためと考えられる。

表からも読み取れるように、墳裾の標高は一定せず、かなりのばらつきがみられる。2 段目裾についても同じく標高にばらつきがみられ、このことは同時に 1 段目平坦面が同一の標高で全周していないことを表している。これらのことから判断すると、地形的にかなり制約されながら、墳裾の構築や段築の整備等がすすめられていったことがうかがえる。ちなみに、斜面の傾斜角度には若干ばらつきがみられるが、各斜面ともおおむね 1 段目の勾配がわずかに緩やかなつくりとなっている。

墳丘の規模 以上の作業の結果、復元された手繰ヶ城山古墳の規模の概要は次のとおりである。後円部の中心は確定できないが、Z 点、Z1 点、Z2 点から大きく離れない地点を通り、ここから前方部隅角の X-Y 点の中間地点である W 点に至るラインを墳丘主軸とした。墳丘主軸は MN53° E である。全長約 130m、後円部長約 73.5m（主軸方向）～80m（主軸直交方向）、前方部長約 56.5m、くびれ部幅約 45.5m、前方部幅約 61.5m、後円部高さ約 14.5m（南東斜面）

～17.5m（北西斜面）、前方部高さ約 10.1m（主軸上）である。後円部・前方部ともに 2 段築成で、葺石と埴輪を備える。

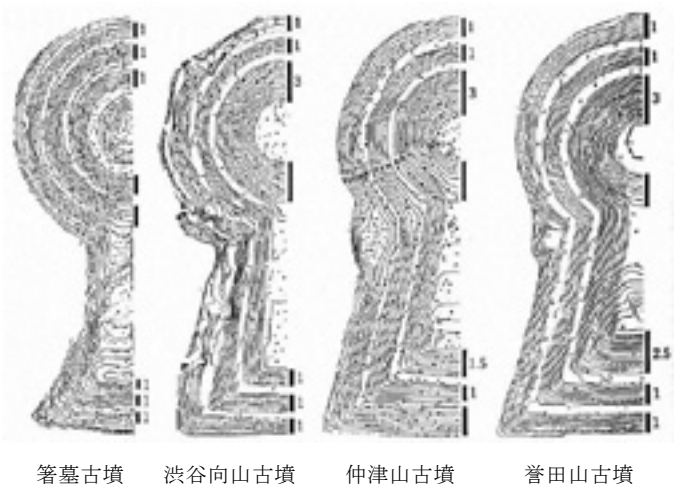
片方のくびれ部には隣接して、後円部 1 段目に取り付く造出が存在する。造出は南北約 26m、東西約 19m で、主軸（後円部方向）に対してやや幅広の長方形を呈する。高さは約 4.3m である。造出の東側には 1 基の陪塚が隣接する。陪塚は東西約 27.5m、南北約 24m で、長方形を呈する。高さは 3～4.5m 前後である。

2. 手繰ヶ城山古墳の築造規格

手繰ヶ城山古墳は、段築と葺石、埴輪が備えられた北陸最初の大形前方後円墳である。弥生時代においては、ここ永平寺町周辺に終末期段階の首長墓である乃木山墳墓などが確認されている。しかし、古墳前期前半の段階には、花野谷 1 号墳（円墳ないし約 23m の前方後円墳）や安保山 2 号墳（約 34m の前方後円墳）のような、小河川流域に展開する地域首長の古墳を除いて、九頭竜川を擁する広大な平野を統括するような首長の古墳は未だ出現していない。つまり、手繰ヶ城山古墳は、福井平野における初代の大首長の古墳として、外部施設が完備された形で突如出現するのである。このように手繰ヶ城山古墳の登場は、地域勢力による内部発展の帰結というよりも、畿内政権による強力な後ろ盾を獲得した首長の台頭を髣髴とさせるのであり、その墳丘形態に畿内前方後円墳の築造規格を読み取ろうとするのにはこうした所以がある。

まず段築の構造と規模に注目してみたい。河村好光は、白石太一郎による研究成果（白石ほか 1984）を基礎にして、前期から中期における 3 段築成大形前方後円墳の築造規格の変遷過程を、Ⅰ型式（墳丘上段が前方後円形とならない）→Ⅱ型式（墳丘上段裾が前方部墳頂より低い位置を巡り、墳丘上段が前方後円形となる）→Ⅲ型式（造出と盾形周濠が整備され、3 段重ね前方後円墳が完成する）と考えている（河村 1997・2001）。手繰ヶ城山古墳は 2 段築成ではあるが、墳丘のほぼ全体に平坦面を巡らせて段築成を整えており、3 段築成前方後円墳の強い影響のもとで築かれているとみてよい。手繰ヶ城山古墳は、墳丘 2 段目裾が前方部墳頂より低い位置を前方後円形に巡っている。だが、Ⅲ型式のような定型化した造出や盾形周濠は存在していない。したがって、佐紀陵山古墳などを嚆矢とするⅡ型式の前方後円墳との強い関係が指摘できる⁽¹⁾。

都出比呂志は、3 段築成前方後円墳の各段の斜面比を対比し、次のことを指摘している。すなわち、渋谷向山古墳以後、後円部の斜面比が下から 1:1:3 になること、新しい時期の古墳ほど前方部が発達し、それにつれて前方部 3 段目の斜面比の数値が大きくなることである（都出 1989）。手繰ヶ城山古墳の後円部の斜面比（北西斜面）は、下から 1:3.2 であり、渋谷向山古墳以後の 3 段築成前方後円墳の中段：上段の比率にほぼ合致する。ま



第 14 図 前方後円墳の段築成（都出 1989）

第 8 表 後円部直径とくびれ部幅の比率の比較（カッコ内は推定値）

	渋谷向山古墳	五色塚古墳	網野銚子山古墳	佐紀陵山古墳	手繰ヶ城山古墳	佐紀石塚山古墳	仲津山古墳	石津丘古墳	誉田山古墳
上段裾	3.7	3.8	3.1	3.0	2.2~2.1	(2.2)	2.1	1.7	1.7
中段裾	2.9	2.7	2.2	2.2	1.8~1.6	(1.8)	1.7	1.4	1.4
下段裾	(2.2)	1.9	(1.8)	(1.8)	—	(1.6)	(1.5)	(1.3)	(1.3)

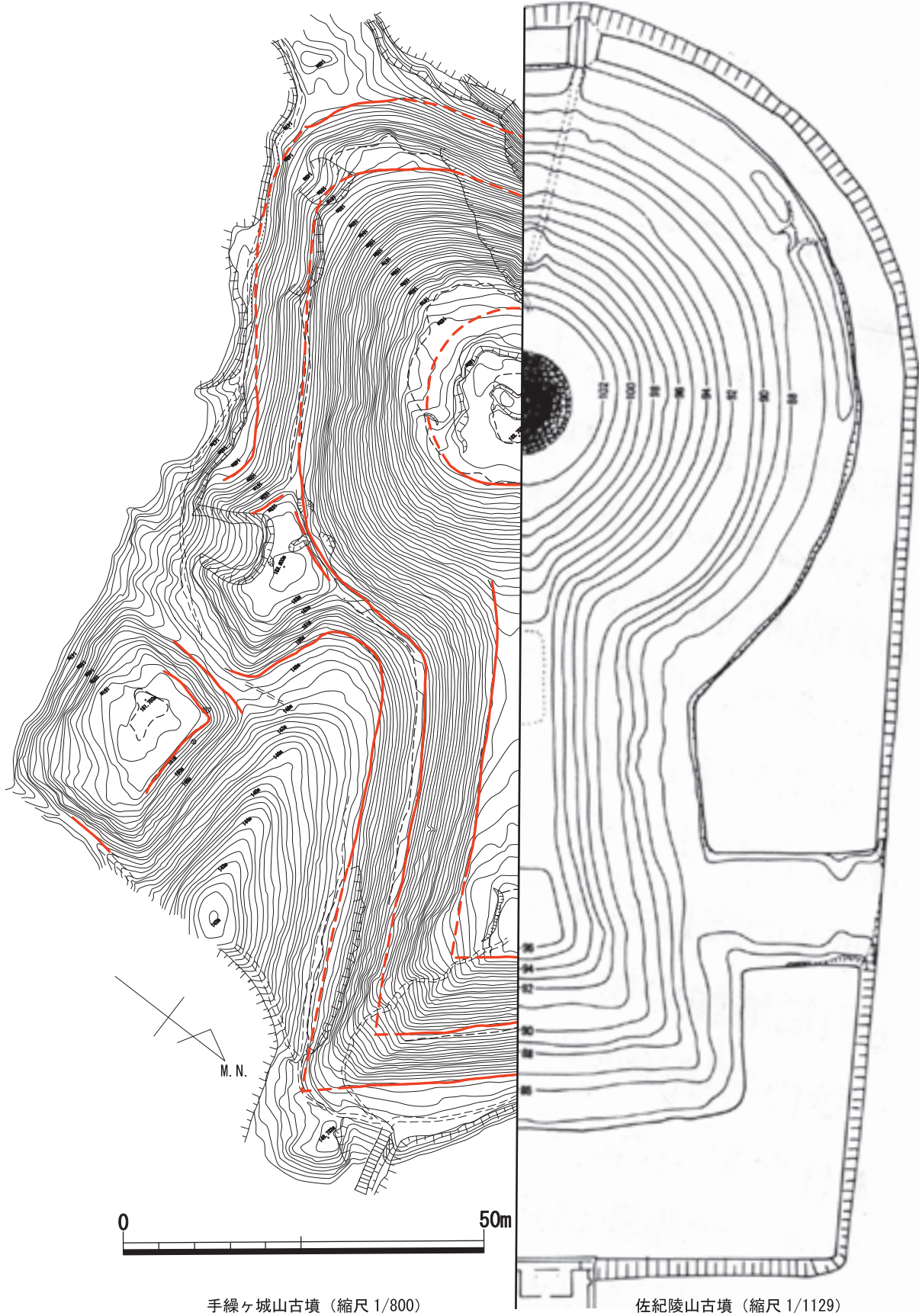
* 数値は、後円部直径÷くびれ部幅で、小数点第 2 位を四捨五入した

* 渋谷向山古墳については、後円部 4 段目を上段とし、後円部 4 段目に付く隆起斜道部をくびれ部とみなした

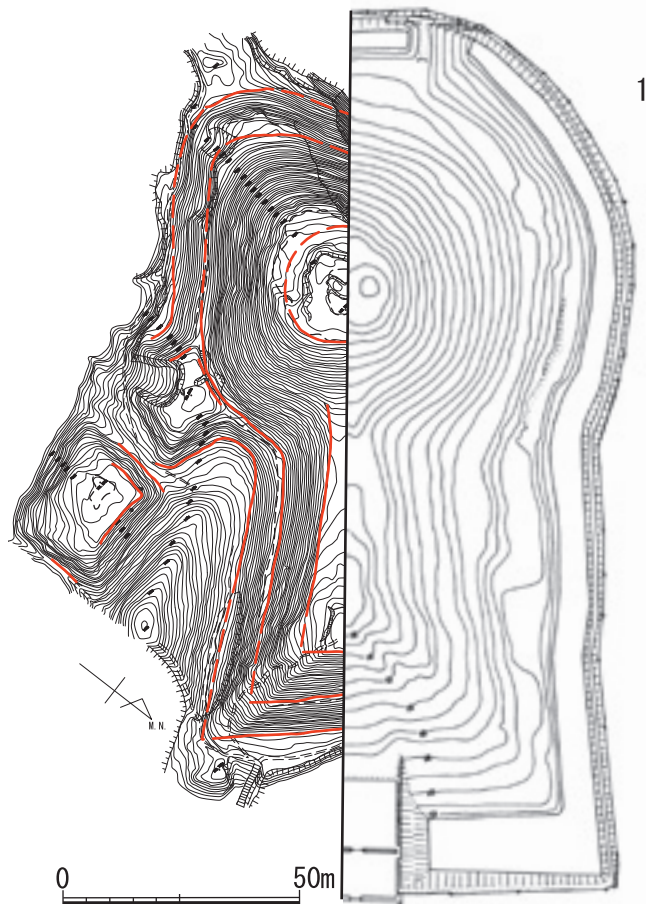
た、前方部の斜面比は前面のところで 1 : 1.35 の値を示す。これを第 14 図にあてはめると、渋谷向山古墳と仲津山古墳の間に位置付けることができ、さきのⅡ型式前方後円墳とする理解とも矛盾しない。

さらに関連して、前方部が発達するにつれて、くびれ部の斜面比も増大し、その結果、後円部直径に対するくびれ部の幅が拡張していく。第 8 表は、河村が提示した表や各古墳の調査報告書、陵墓図を基礎に、前期から中期における代表的な大型前方後円墳の後円部直径とくびれ部幅の比率を示したものである。下から 3 段目にあたる上段裾の値を見ていくと、渋谷向山古墳から佐紀陵山古墳の段階までは比率が 3.0 以上を示すのに対し、仲津山古墳の段階以後は 2.1 以下へ変化している。つまり、くびれ部の幅が、後円部直径のおよそ半分の大きさにまで拡張していく。中段も同様に、佐紀陵山古墳の段階までは比率が 2.2 以上で、仲津山古墳の段階以後は 1.7 以下となる。下段に関しては不確かな古墳があるが、やはりくびれ部幅が拡張していく過程が読み取れる。手繰ヶ城山古墳は、後円部の正確な直径が導き出せないが、おおよそ上段（2 段目）裾で 2.1~2.2、下段（1 段目）裾で 1.6~1.8 の比率となる。その値は、佐紀陵山古墳から仲津山古墳への過渡的な様相を示す。

手繰ヶ城山古墳は、後円部に対して、前方部がやや短い前方後円墳である。岸本直文によれば、畿内の大型前方後円墳には、前方部が長い系列とやや短い系列があり、後者は前期後葉に佐紀陵山古墳を祖形として成立する⁽²⁾。佐紀陵山型の前方後円墳は、前方部の長さや開き具合が未発達で、くびれ部には造出がないことを特徴とする（岸本 1992・1995）。第 15 図は 2 段築成の手繰ヶ城山古墳（地形や崩落による影響が比較的少ない墳丘南側を採用した）に、縮尺をやや縮めた佐紀陵山古墳の上段・中段を重ね合わせたものである。後円部墳頂平坦面と前方部墳頂の前端ラインがほぼ一致するとともに、細長く平坦な前方部上面の開く角度も合致する。また、手繰ヶ城山古墳の前方部墳頂に見られる方形の高まりと佐紀陵山古墳の 96m の等高線の走向までもがほぼ合致する。後円部墳頂から前方部上面鞍部までの比高差も約 6m と変わらない。他にも、後円部上段（2 段目）裾や前方部下段（1 段目）の位置がほぼ一致する。手繰ヶ城山古墳の後円部は変形が著しいが、佐紀陵山古墳の各段の円弧を伸ばしていくと部分的に一致する箇所が見られる。各段の上面を巡る平坦面は、佐紀陵山古墳では幅広なのに対して、手繰ヶ城山古墳では北西および南西斜面を除いて全体的に狭いが、これは先述のとおり幅広の 1 段目平坦面を確保する地形的余裕がないことに由来すると思われる。平坦面の幅が異なる影響で、手繰ヶ城山古墳の墳裾と佐紀陵山古墳の中段裾とが完全には一致しないことや、段築数の違いなどの問題があるが、上部構造を中心に広く共通点が認められ、同じ築造規格によって設

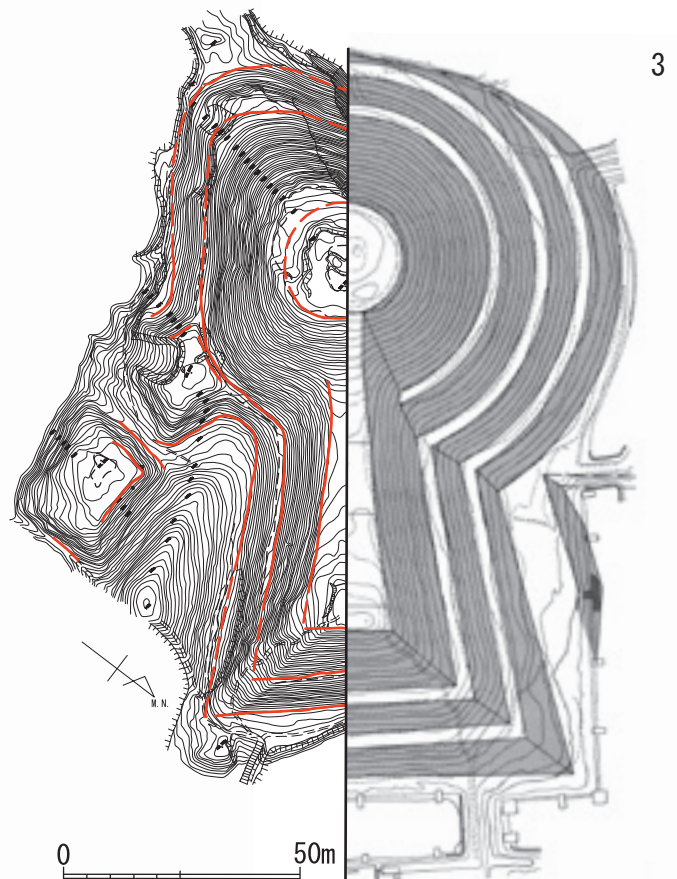


第 15 図 手繰ヶ城山古墳と佐紀陵山古墳 (右) の比較



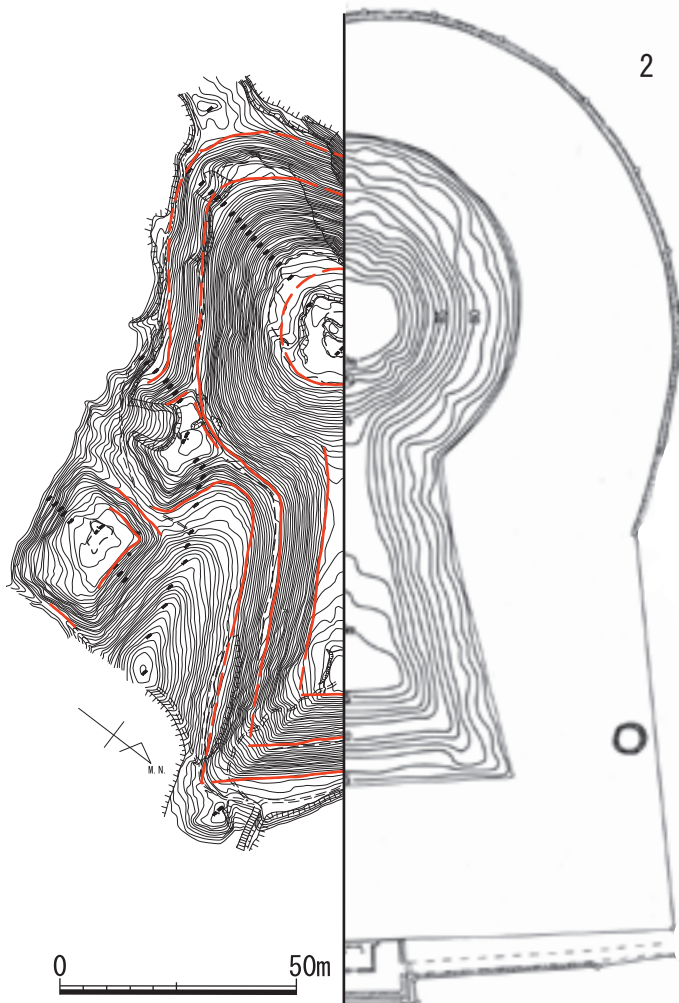
手繰ヶ城山古墳 (縮尺 1/1600)

佐紀石塚山古墳 (縮尺 1/2096、反転)



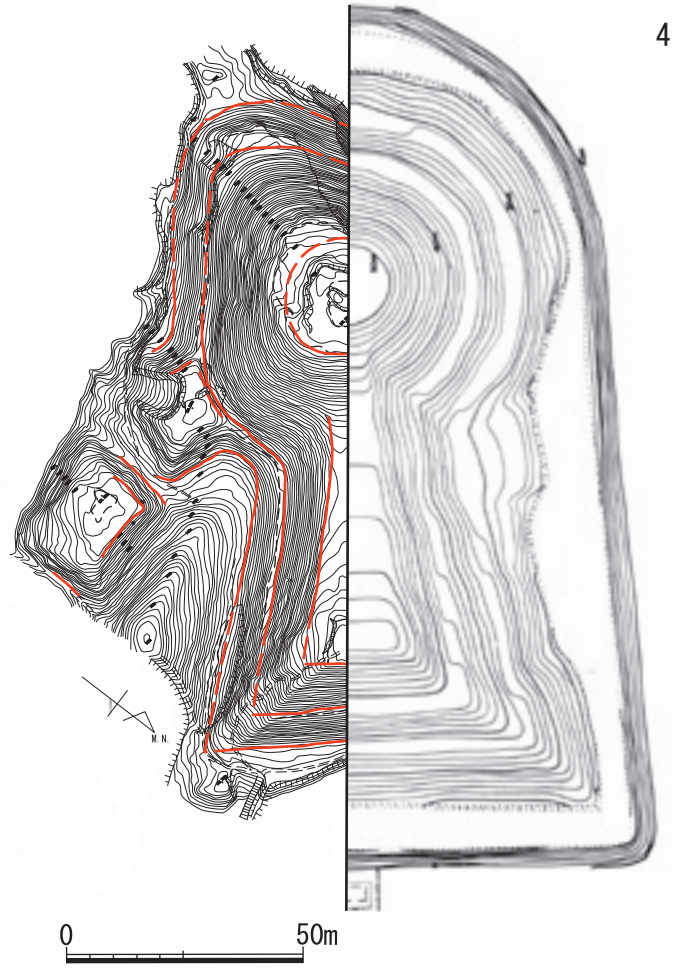
手繰ヶ城山古墳 (縮尺 1/1600)

五社神古墳 (縮尺 1/2762、反転)



手繰ヶ城山古墳 (縮尺 1/1600)

宝来山古墳 (縮尺 1/2572)



手繰ヶ城山古墳 (縮尺 1/1600)

仲津山古墳 (縮尺 1/2872)

第 16 図 手繰ヶ城山古墳と各古墳との比較

計されたものと判断される。

ただし先述のように、手繰ヶ城山古墳では前方部斜面比の増加傾向がみられ、それとともにくびれ部や前方部幅の拡張化がすすんでいる。前方部上面に関しても、前面に向かってやや高まっていくという違いが見られる。この点に注目しながら同じ佐紀古墳群で佐紀陵山古墳に後続する佐紀石塚山古墳⁽³⁾と対比してみると（第8表）、墳丘がかなり変形し段築が不明瞭だが、後円部直径に対するくびれ部幅の比率はおおよそ上段裾において2.2、中段裾において1.8で、手繰ヶ城山古墳と同様に佐紀陵山古墳よりもくびれ部の幅が広がっているように思われる。前方部上面についても、佐紀陵山古墳には見られなかったが、前面へ向けて徐々に高まっていく様子が確認できる。前方部墳頂の前端ラインは合致せず、前方部の各段についても対応が不明確で問題を残すが、後円部墳頂平坦面はほぼ一致する。前方部上面の開く角度もほぼ一致するように見える（第16図1）。

なお第16図2～4は、宝来山、それに後続する五社神、さらに中期初頭の仲津山の各古墳の縮尺をそれぞれやや縮めて同様に重ね合わせたものである。これら3つは、岸本が前方部の長い系列と位置づけた古墳である。宝来山古墳の場合、後円部墳頂平坦面や後円部上段裾の円弧にずれがみられる。前方部墳頂の前端ラインはほぼ一致するが、前方部上面の開く角度は異なっている。五社神古墳の場合は、後円部墳頂平坦面と前方部墳頂の前端ラインはほぼ一致し、前方部上面の開く角度も合致する。しかし、後円部上半が最上段と上段に分かれ、その間の平坦面はくびれ部の箇所ですべて途絶して全周しない。前方部前面の段築幅も一致しないなど、段築構造が大きく異なる。仲津山古墳の場合も宝来山古墳と同様に、後円部墳頂平坦面や後円部各段裾の円弧、前方部上面の開く角度などに齟齬がみられる。

手繰ヶ城山古墳の片側には、くびれ部からやや離れたところに、後円部1段目に取り付く形で造出が存在する。本来はくびれ部にあるものが、後円部から続く小尾根を利用して築かれたのであろう。造出は佐紀古墳群から本格的に出現する。佐紀陵山古墳には、前方部の両側面に幅広の渡り土堤が取り付け、この渡り土堤を切断すれば造出に相当する規模の施設になるが、確実な造出は未確認である。後続する佐紀石塚山古墳には、西側くびれ部の外側に長方形に張り出す等高線が見られ、くびれ部の片側に造出が存在するようである。同時期の五社神古墳にも、くびれ部の片側ないし両側⁽⁴⁾に造出が付くことが明らかになってきている。

造出は一般的に、1段目平坦面からやや下がった低い位置にあったものが、1段目平坦面の高さに揃えて築かれるようになってしまう。手繰ヶ城山古墳の造出は、後円部に取り付く尾根を上面幅1.6m、深さ0.75m程度の溝により断ち切って築かれ、溝底面を1段目平坦面の高さに揃えている。造出墳頂面は、後円部1段目平坦面よりも1m前後高いつくりとなっており、通有の造出とは様相が異なる。手繰ヶ城山古墳は時期的に造出導入期の古墳であり、造出の整備がまだ不徹底な状況を示すのであろうか。具体的な調査による解明が期待される。

陪塚は約27.5×24mの方墳で、造出の東側に隣接して築かれている。陪塚の短辺は尾根に直交する幅広の溝によって区画され、側面は主に地山整形で墳裾が構築されている。これは北陸における弥生時代の台状墓のつくり方を継承するものである。未発掘の状況では陪塚としてよいか直ちに断定はできないが、後円部南西斜面から伸びる尾根、また前方部北側隅角から伸びる尾根⁽⁵⁾には、緩やかな尾根を上がった先に、古墳を築くのに適当な高まりがあるにもかかわらず

らず、そこは墳丘として利用されているかどうか不明確であり、陪塚はあくまで主墳に寄り添うかのように配置されていることから、時期的にも系譜的にも主墳と強い関係で結ばれたものと現時点では判断した。大型前方後円墳の周りに計画的に配置された陪塚は、前期前半の大和・柳本古墳群には見られず、佐紀古墳群からはじめて現れる（山田 1997）。佐紀陵山古墳では未確認だが、佐紀石塚山古墳と五社神古墳の段階には陪塚が出現しており、これは先ほどの造出の付設という点とも時期的に矛盾しない。

3. 手繰ヶ城山古墳の時期と歴史的評価

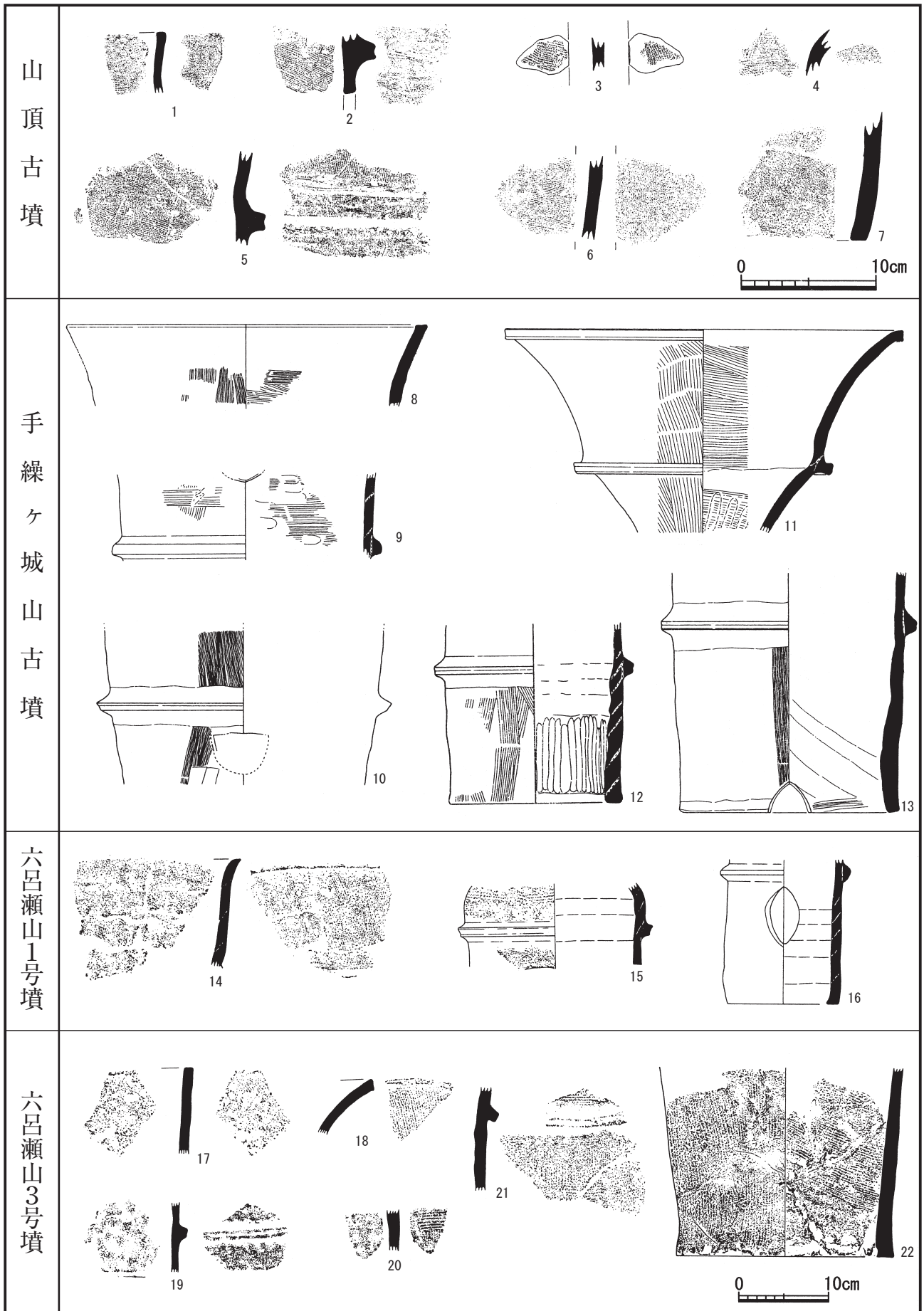
(1) 築造時期の評価

このように、手繰ヶ城山古墳は佐紀陵山型の築造規格に属する。しかし、佐紀陵山古墳の完全な相似墳ではなく、くびれ部や前方部には発達した様相がみられた。これらのことを勘案すると、手繰ヶ城山古墳は佐紀陵山古墳よりも後出し、佐紀陵山型の中でもやや新しい段階のものと考えられる。佐紀陵山古墳に後続する佐紀石塚山古墳とは同じ築造規格に属するかどうか不明確だが、時期的に近接することが推測される。

佐紀陵山古墳は、古墳時代を前期・中期・後期の3時期に区分し、さらに前期を4期に分けた場合の第3期に位置付けられる⁽⁶⁾。佐紀陵山古墳からは川西編年Ⅱ期に属する円筒埴輪と、器財埴輪の出土が知られている。川西編年Ⅱ期の円筒埴輪をめぐる多くの研究者が細分を試みており、佐紀陵山古墳の資料についてはⅡ期の古段階におく説と新段階におく説がある⁽⁷⁾。佐紀陵山古墳とは強い関係をもつマエ塚古墳や瓦谷古墳（埴輪棺）の鱗付円筒埴輪は、Ⅱ期を代表する萱振1号墳や上の山古墳の資料と比べると、突帯間隔に対して高い底部高をもつ。Ⅱ期（群）の鱗付円筒埴輪においては、突帯間隔に対する底部高の比率が時期とともに縮小傾向を示す（廣瀬 2006）ことから、マエ塚古墳や瓦谷古墳の円筒埴輪は形式的に先行することが考えられる。底部高の比率は不明確だが、佐紀陵山古墳からは底部径に対して底部高が著しく高い鱗付円筒埴輪の出土が報告されており、Ⅱ期の古段階にさかのぼる可能性をもつ。佐紀陵山古墳と瓦谷古墳から最古期の器財埴輪（蓋形・盾形）が出土している点も、このことを傍証するだろう⁽⁸⁾。よって、川西編年Ⅱ期におおむね対応する古墳前期の第3期の中でも、佐紀陵山古墳は古い段階にまでさかのぼる可能性をもつ。

佐紀陵山型に属する手繰ヶ城山古墳は、墳丘築造規格の類似からみて連続する時期に築かれたことが推測される。同じく前期を4期に分けた場合の第3期、もしくは第4期に降る頃のもの判断できる。須恵器のTK73型式に5世紀前葉の年代を与え⁽⁹⁾、そこから逆算して前期末を4世紀後葉頃におこなれば、4世紀中葉を上限とする4世紀後半におさまる年代が与えられる。岸本によって佐紀陵山型と評価された古墳の大半が、古墳前期の第3期～第4期にかけて各地に出現することと深く関係すると思われる。

手繰ヶ城山古墳採集の円筒埴輪は、川西編年Ⅱ期に属する。外面の2次調整にA種ヨコハケやナデを施す。確実にB種ヨコハケと言えるようなものは未確認である。透孔は半円形ないし逆三角形のものが確認されている。底部高が20cm前後（底部径は25～28cm）のものが複数見られるが、突帯間隔と対比できる資料は未確認である。手繰ヶ城山古墳と前後する時期の資料には福井市山頂古墳、六呂瀬山1号墳・3号墳のものがある。山頂古墳の円筒埴輪は、器壁が



第 17 図 各古墳出土の円筒埴輪

薄く、外面 1 次調整に細密なハケメを施す。方形ないし三角形の透孔をもつ。六呂瀬山 3 号墳のものは川西編年Ⅲ期に比定されている。外面 2 次調整にストロークの長いヨコハケ（Ca 種ヨコハケ）を施す個体が認められる。円形・方形の透孔をもつ。これらの古墳から出土した円筒埴輪はいずれも黒斑を有する。鱗付円筒埴輪は未確認である。形象埴輪に関しては、手繰ヶ城山古墳からは家形・蓋形とみられる破片、六呂瀬山 1 号墳からは家形の他に、甲冑形・舟形・罌形とみられる破片、六呂瀬山 3 号墳からは家形・蓋形・盾形・甲冑形（草摺部）・罌形・鶏形などが確認されている。

これらを順に並べると、（山頂古墳）→手繰ヶ城山古墳、（六呂瀬山 1 号墳）→六呂瀬山 3 号墳のようになる。山頂古墳の円筒埴輪は直接比較できる資料が乏しいが、外面調整や器壁の厚みの違いが時期差を反映するものとみなすと、手繰ヶ城山古墳のものより相対的に古い印象を受ける。同じく六呂瀬山 1 号墳の円筒埴輪も編年的根拠にやや欠けるが、器財埴輪の種類は 3 号墳の方が豊富になっている。また古墳の立地の点でも、3 号墳の方が後出する可能性が高い。なお、六呂瀬山 3 号墳と同じ川西編年Ⅲ期に属する免鳥長山古墳からは、円形の透孔をもち、外面 2 次調整に B 種ヨコハケを施す個体が確認されており、相対的に新しく位置付けられる。

このように、手繰ヶ城山古墳の円筒埴輪が川西編年Ⅱ期に属することを再確認し、それとともになお検討の余地を残すが、時系列的な変化を明らかにした。その結果、Ⅱ期のどの段階に位置付けられるかは、現状では不明確と言わざるを得ない。手繰ヶ城山古墳の築造時期に関しては、円筒埴輪が有力な編年的根拠の一つとなっているが、さらに研究を深化させると同時に、墳丘築造規格の対比を通して時期的絞り込みをさらにすすめていくことが必要である。

（2）福井平野における大首長墳の出現と手繰ヶ城山古墳

中小河川流域ごとに展開する集団を統括し、それらの上位に立つ首長の古墳を「地域首長墳」とするならば、それら水系ごとの首長系譜をまとめ、その上に君臨するような盟主的な位置付けにある中核的古墳は「大首長墳（あるいは広域首長墳）」と呼ぶことができるだろう⁽¹⁰⁾。

手繰ヶ城山古墳が登場する前の前期前半の段階には、足羽川流域に花野谷 1 号墳（墳長約 23m の前方後円墳か）や成願寺山 30 号墳（墳長約 30m の前方後方墳か）が、日野川流域に安保山 2 号墳（墳長 34m の前方後円墳）などの有力な地域首長の古墳が現れ、また足羽山古墳群の嚆矢をなす山頂古墳（直径約 60m の円墳）がこの段階まで遡る可能性をもつが、いずれも 60m 以下の規模にとどまる。

これに対して、前期後半に突如出現した手繰ヶ城山古墳は、墳長約 130m の大型前方後円墳であり、同時期の越前地方には、後続する可能性が高い六呂瀬山 1 号墳を除けば、これに匹敵する古墳は存在しない。墳形と墳丘規模をいっそう際立たせる段築・葺石・埴輪を完備するようになることも、前期前半のあり方とは大きく異なる。手繰ヶ城山古墳は、中小河川が集まる九頭竜川によって形成された福井平野内の諸集団を統括した初代の首長の古墳と評価することが可能である。その登場は、水系単位ごとに並立していた弥生以来の首長系譜が統括され、手繰ヶ城山古墳の被葬者を頂点とする重層的な古墳秩序が福井平野内に形成されるようになったことを表している。前期後半には、19 点の腕輪形石製品と方形板革綴短甲をはじめとする大量の鉄製品・銅鏃などを副葬する雨の宮 1 号墳（墳長 64m の前方後方墳）が能登に、日本海

第9表 福井平野の大首長墳と諸画期

地域	古墳名	墳形	墳長(m)	段築	葺石	埴輪	埋葬施設	須恵器型式	主な副葬品	小期	画期	大首長墳の主な動向
松岡	手繰ヶ城山	前方後円	約130	2段	○	Ⅱ期	未詳**		未詳	3期	第2	大首長墳の出現
丸岡	六呂瀬山1号	前方後円	140	2段	○	Ⅱ期	石棺片		未詳	4期		
丸岡	六呂瀬山3号	前方後円	85	2段	○	Ⅲ期	未詳		未詳	5期	第3	墓域の移動 墳形の変化
川西	免鳥長山	帆立貝形	90.5	2段	○	Ⅲ期	舟形石棺(Ⅱ期)		鉄形石2・車輪石2・鐵形石製品7以上・環頭形石製品2・勾玉3・管玉2・甕玉1・鉄器片	5期		
松岡	泰遠寺山	帆立貝形	約64	2段?	○	Ⅳ期	舟形石棺(Ⅲ-2期)		半円方形帯神獸鏡1・内行花文鏡1・ヒスイ勾玉2・ガラス勾玉2・緑色凝灰岩管玉8・ガラス甕玉2・ガラス蜻蛉玉2・ガラス丸玉9・ガラス小玉448	6期	第4	墓域の移動
松岡	石舟山	前方後円	79	2段	×	Ⅳ期	舟形石棺(Ⅲ-2期)	TK208*	三角板革綴短甲片・鉄刀片・須恵器片	7期		
松岡	二本松山	前方後円	89	2段	×	Ⅳ期	舟形石棺2(Ⅲ-3期)	TK23*	甲冑・ヒスイ勾玉【1号石棺】、仿製四獣鏡1・金銅冠1・鍍銀冠1・鉄剣1・鉄刀2・鹿角製刀装具・小札銚留眉庇付冑1・三角板銚留短甲1・頭甲1・脇当1・碧玉管玉4【2号石棺】、須恵器片	8期	第5	立地の変化
金津	椀貸山	前方後円	45	2段	○	Ⅴ期	横穴式石室石屋形	MT15	須恵器片(石室内出土)	9期前半		
金津	神奈備山	前方後円	59	2段	○	×	横穴式石室(切石積)石屋形	TK10 TK43	銅鏡片2・耳環1・振文環頭大刀把頭片2・貴金具2・鉄刀2以上・刀子3以上・鉄鏃28以上・青1・甲1・鹿角装刀子3以上・ミニチュア鉄斧1・轡1・辻金具1・鉄地金銅革帯金具12・同鈎金具2・金銅半球形飾金具5・ガラス小玉付金銅半球形飾金具3・鉄地金銅杏葉1・鉄地金銅鞍金具1・鉸具2・兵庫鎖2・木芯鉄板張壺鏡1・ガラス小玉22・須恵器約150ほか	9期後半	第6	墓域の移動 舟形石棺使用途絶 横穴式石室の採用

*採集品による **レーダ探査により石棺確認

側最大の前方後円墳である柳田布尾山古墳(墳長 107.5m)が越中に出現するなど、水系ごとに並立していた地域勢力の統合がすすみ、広域的に統括されるようになった結果、大首長墳に比肩される古墳が北陸各地に現れるようになったことがうかがわれる。

前期前半における前方後円墳の出現を第1の画期とするならば、前期後半における外部施設が完備された大型前方後円墳の出現、つまり手繰ヶ城山古墳の登場は第2の画期とすることができる。そしてこの第2の画期は、変動を伴いつつも古墳後期まで継続される「福井平野における大首長墳体制」ともいふべきあり方の端緒でもあり、決して小さな画期にとどまるものではない。手繰ヶ城山古墳以後、二本松山古墳までの大首長墳の埋葬施設には、笏谷石製の石棺が採用または推定される。大首長墳の下位に属するのが足羽山(小山谷古墳・竜ヶ岡古墳など)や安保山などの各地の古墳群で、これらはほぼ拮抗する地域首長の墓域であるが、笏谷石産地をかかえ石棺の製作を管掌し、また石棺の使用を通じて大型前方後円墳との関係を保有する点で、足羽山古墳群は他の古墳群と明確に区分される。このように、第2の画期を経て、大首長墳を頂点とする重層的な古墳秩序が形成されるようになった。

なお手繰ヶ城山古墳以降は、第9表のとおり、六呂瀬山1号(4期)→六呂瀬山3号(5期)→免鳥長山(5期)→泰遠寺山(6期)→石舟山(7期)→二本松山(8期)→椀貸山(9期前半)→神奈備山(9期後半)の各古墳のように編年される。大首長墳は、基本的には段階的に現れるが、直径約15kmの福井平野内で墓域を松岡→丸岡→川西→松岡→金津というように転々と移動させている。これは単なる墓域の移動ではなく、墳形や埋葬施設の変化、規模の縮小などの変動を伴うことから、畿内政権内での政治変動と連動⁽¹¹⁾する動きであったことが推測される。

今回の調査を通じて、手繰ヶ城山古墳は佐紀陵山型の墳丘築造規格に属するということが明らかにした。この推定が正しければ、外部施設が完備された北陸最初の大型前方後円墳である手繰ヶ城山古墳の出現に画期をおく通説を、さらに補強し強調する結果が得られたことになる。従来は主に円筒埴輪や大首長墳の編年観から築造時期が検討され、また墳丘の大型化や外部施設の充実化などから畿内政権との関係が類推されてきた。これに対して、今回の調査では測量図をより充実させ、墳丘形態や墳丘築造規格の解明をすすめ、さらに具体的な築造時期や出現背景を探った。このように、手繰ヶ城山古墳の築造時期や出現背景を解明する糸口が得られたことは重要と言えるだろう。ただし、完全な相似墳ではなく、墳丘の変容が見てとれる。また、川西編年Ⅱ期の埴輪に特徴的な「規格性のある鱗付円筒埴輪と器財を中心とする形象埴輪⁽¹²⁾」を欠いており、現状では佐紀陵山古墳や佐紀古墳群からの影響を過大に評価することはできない。前段階までの伝統や地域の変容が墳丘に強く反映している可能性も考えられることから、築造時期や古墳の出現背景をめぐっては、さらなる調査・研究を積み重ねていくことが必要である。

(高橋浩二)

注

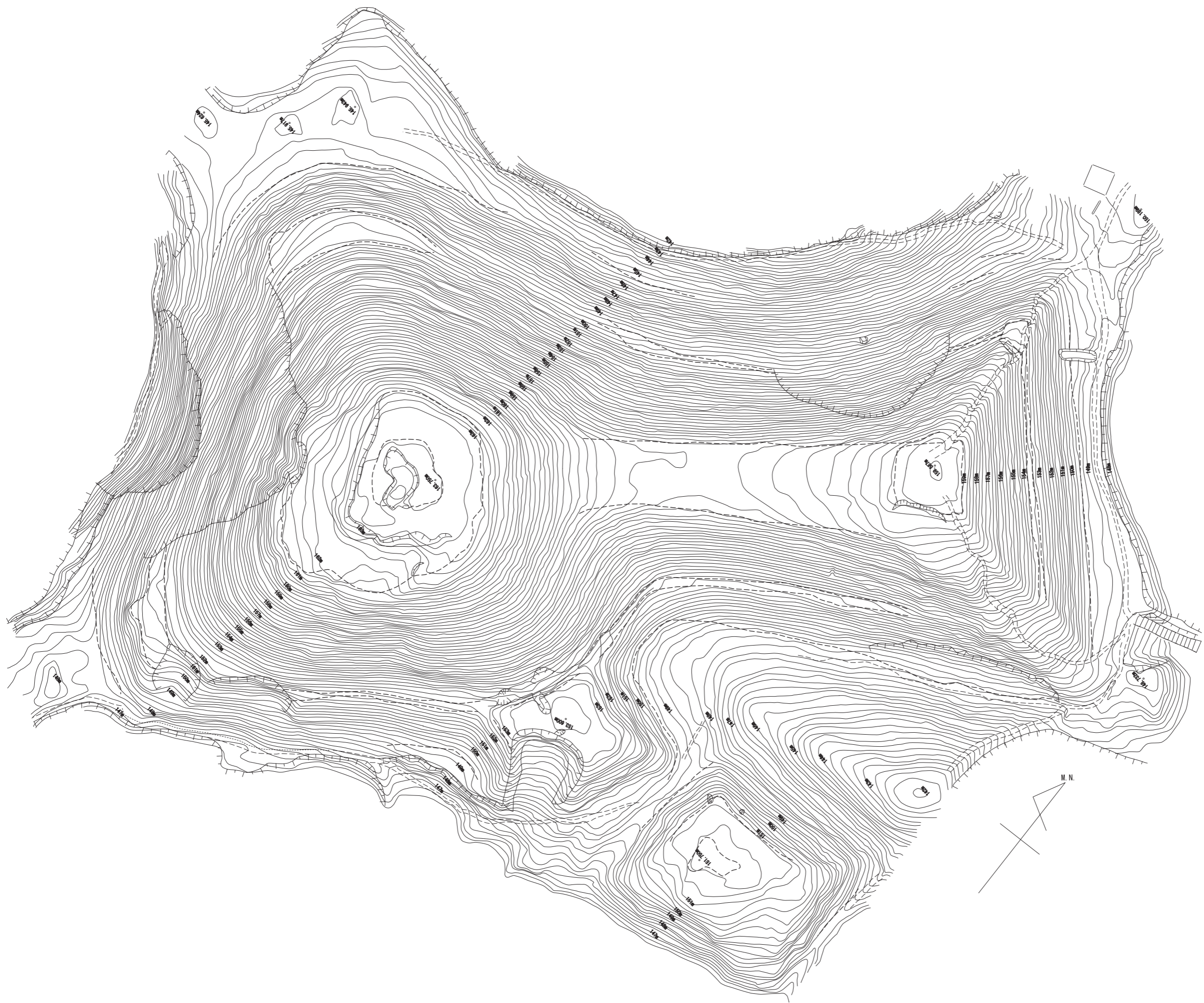
- (1) 河村 2001 では、段築構造の変化が正しく指摘されながらも、前方部の形状から、「六呂瀬山 1 号墳は前方部頂上が水平であることでⅠ-2 型式との関連が、これに先行する手繰ヶ城山古墳は、前方部の開き方が曲線的で頂上は先端に向けて高くなっている」として、箸墓や西殿塚、渋谷向山、甲斐銚子塚、椿井大塚山の各古墳と同じⅠ-1 型式に類型化され、相対的に古く位置付けられた。
- (2) 岸本はその後、佐紀陵山型のモデルが渋谷向山古墳に求められることを指摘している（岸本 2008a）
- (3) 佐紀古墳群（西群）内の大型前方後円墳は墳丘築造規格から 2 系列に分けることが可能で、その編年関係は佐紀陵山古墳→佐紀石塚山古墳、宝来山古墳→五社神古墳となり、佐紀石塚山と五社神とがほぼ同時期の古墳であることが岸本 2008a によって指摘されている。
- (4) 有馬ほか 2005 ではくびれ部の片側、岸本 2008b ではくびれ部の両側に造出が付くことが想定されている。
- (5) 福井大学考古学研究会による分布調査では、この箇所に一辺約 17m の方墳である松岡 2 号墳が指摘され、墳丘上とその周辺からは数片の土器片が採集されている。墳丘は鉄柱の付設で一部が削平されたと考えられている（福井大学考古学研究会編 1972）。今回の調査時には、明確な墳裾は確認できなかった。この箇所については、手繰ヶ城山古墳造営のさいの資材置場とみる仁科章の説が紹介されている（古川登編 1982）。
- (6) 前方後円墳集成では 4 期の指標として佐紀陵山古墳が挙げられているが、定型化以前の長持形石棺の存在から、3 期に属することが指摘されている（今尾 1992）。
- (7) 前者の説として廣瀬 2006、後者の説として鐘方 2003 などがある。廣瀬はⅡ期（群）の鱗付円筒埴輪について、ⅡA（マエ塚古墳）→ⅡB（萱振 1 号墳）→ⅡC→ⅡD の変遷を考える。鐘方はⅡ期をⅡ1 期、Ⅱ2 と区分し、佐紀陵山古墳のものをⅡ2 期とする。
- (8) 器財埴輪の編年は高橋 1992 による。なお、「佐紀陵山古墳の埴輪は明らかに萱振 1 号墳より型式学的に遡る」ことが主張されている（高橋 2004）。
- (9) 光谷・次山 1999 による。
- (10) 地域や首長墳の評価については、中司 1997 を参考にした。
- (11) 都出 1988・和田 1994 による。
- (12) 高橋 1994 による。

参考文献

- 有馬伸・加藤一郎・清喜裕二・徳田誠志 2005「神功皇后 狭城盾列池上陵墓 裾護岸その他整備工事区域の調査および墳丘外形調査」『書陵部紀要』第 56 号、宮内庁書陵部
- 今尾文昭 1992「1～4 期（前期）」『前方後円墳集成』近畿編、山川出版社
- 鐘方正樹 2003「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第 4 号、埴輪検討会
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号、日本考古学会
- 河村好光 1997「秋常山 1 号墳をめぐる問題」『加賀 能美古墳群』寺井町教育委員会
- 河村好光 2001「川田ソウ山 1 号墳をめぐる問題」『石川県鳥屋町川田古墳群』鳥屋町教育委員会
- 岸本直文 1992「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』第 39 巻第 2 号、考古学研究会
- 岸本直文 1995「「陵墓」古墳研究の現状」『陵墓からみた日本史』青木書店
- 岸本直文 2008a「前方後円墳の二系列と王権構造」『ヒストリア』第 208 号、大阪歴史学会
- 岸本直文 2008b「五社神古墳（現・神功皇后陵）の立ち入り見学」『ヒストリア』第 210 号、大阪歴史学会
- 白石太郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田尚 1984「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 3 集、国立歴史民俗博物館
- 高橋克壽 1992「器財埴輪」『古墳時代の研究』第 9 巻古墳Ⅲ埴輪、雄山閣
- 高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第 41 巻第 2 号、考古学研究会
- 高橋克壽 2004「埴輪の成立と展開」『畿内の巨大古墳とその時代』季刊考古学・別冊 14、雄山閣
- 都出比呂志 1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』第 22 号、大阪大学文学会
- 都出比呂志 1989「前方後円墳の誕生」『古代を考える 古墳』吉川弘文館
- 中司照世 1992「北陸」『古墳時代の研究』第 9 巻古墳Ⅲ埴輪、雄山閣
- 中司照世 1997「古墳時代の社会」『福井市史』通史編 1 古代・中世、福井市
- 廣瀬 覚 2006「五色塚古墳と前期後葉の埴輪生産」『史跡五色塚古墳 小壺古墳 発掘調査・復元整備報告書』神戸市教育委員会
- 福井県教育委員会 1988『六呂瀬山古墳群』福井県埋蔵文化財調査報告第 4 集
- 福井市文化財保護センター2007『免鳥古墳群範囲確認調査概要報告書』
- 福井市文化財保護センター2010「収蔵文化財の紹介－足羽山山頂古墳の円筒埴輪－」『平成 20 年度 年報』
- 福井大学考古学研究会編 1972『松岡町古墳分布調査報告書』松岡町教育委員会
- 福井大学考古学研究会編 1978『手繰ヶ城山古墳（松岡 3 号墳）の調査』Ⅱ、松岡町教育委員会・松岡古墳群を守る会
- 古川登編 1982『松岡古墳群の埴輪』松岡古墳群を守る会
- 光谷拓実・次山淳 1999「平城宮下層古墳時代の遺物と年輪年代」『奈良国立文化財研究所年報 1999－Ⅰ』
- 山田幸弘 1997「畿内における陪塚について」『西墓山古墳－古市古墳群の調査研究報告Ⅲ－』藤井寺市教育委員会
- 和田晴吾 1994「古墳築造の諸段階と政治的階層構成－五世紀の首長制的体制に触れつつ－」『古代王権と交流』5、名著出版

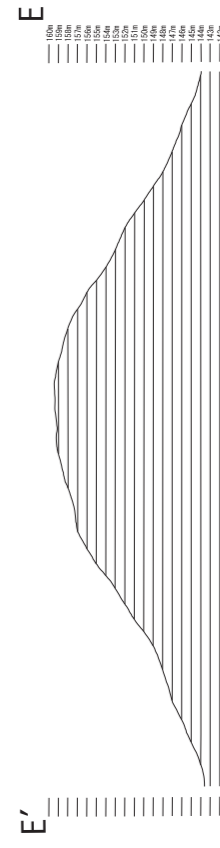
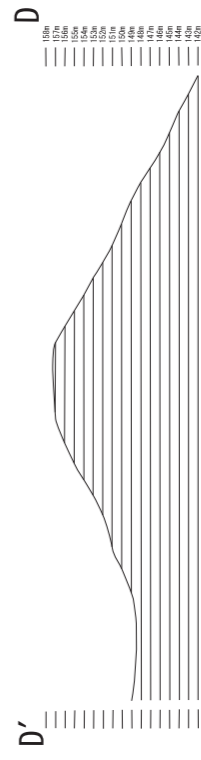
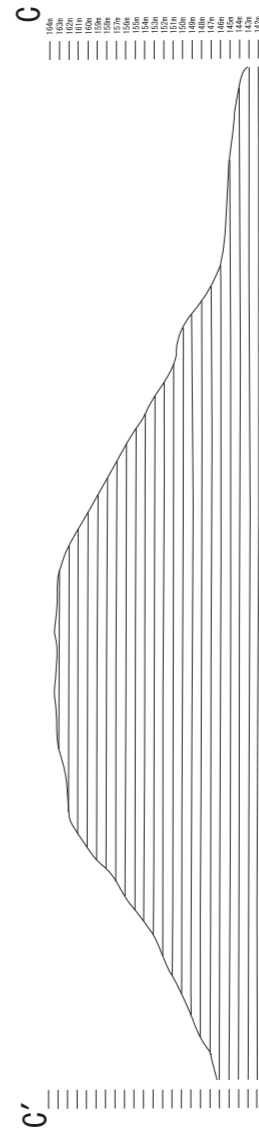
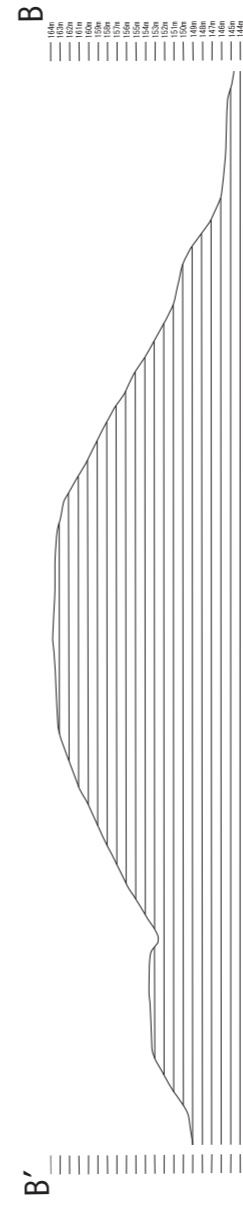
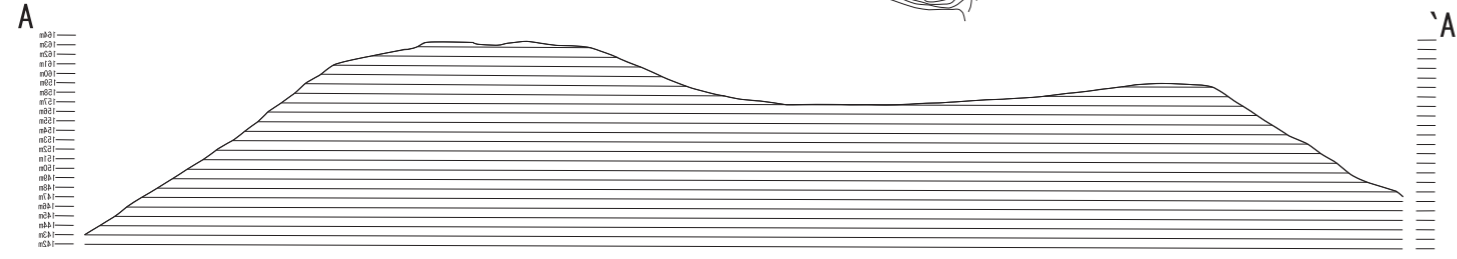
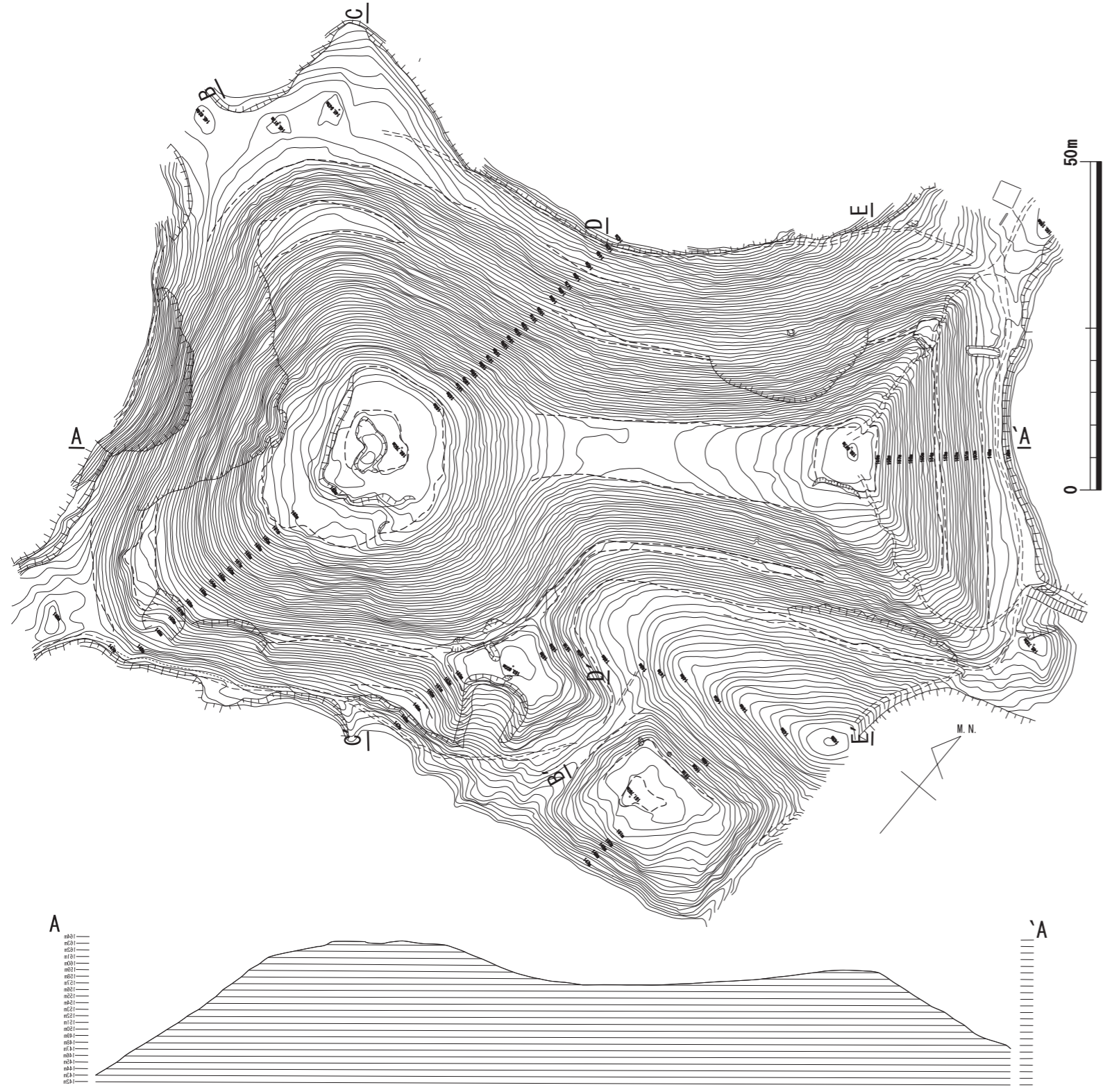
圖 版

図版1 墳丘測量図(縮尺1/500)



50m

0



図版2 墳丘断面図(縮尺1/800)



前方部墳頂から後円部を見る(北東から)



後円部墳頂から前方部を見る(南西から)

前方部北側隅角から後円部を見る(北から)



北側くびれ部から前方部側面を見る(南西から)





前方部南側隅角から後円部を見る(東から)



前方部南側隅角(西から)



前方部北側隅角(北から)



前方部前面墳裾(南東から)



同上(北から)



前方部前面(北西から)

後円部墳頂から北西斜面1段目平坦面を見る(南東から)



後円部北西斜面1段目平坦面(西から)





後円部南西斜面(南から)



後円部背面(南東から)



南側くびれ部(北から)



後円部から造出(手前)と陪塚を見る(西から)



後円部と造出の間の溝(北から)



同上(北東から)



造出と陪塚(左)の間の溝(北西から)



造出(東から)



造出から陪塚を見る(西から)



後円部墳頂(南東から)



同上(北から)



前方部南側隅角外側の残丘(西から)

ふりがな	てぐりがじょうやまこふん -そくりょうちょうさほうこくしょ-					
書名	手繰ヶ城山古墳-測量調査報告書-					
副書名						
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編者名	高橋 浩二					
編集機関	富山大学人文学部考古学研究室					
所在地	〒930-8555 富山県富山市五福3190 TEL076(445)6195					
発行年月日	2011/3/31					
ふりがな 所収遺跡名	所在地	北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
てぐりがじょうやまこふん 手繰ヶ城山古墳 (松岡3号墳)	永平寺町 松岡志比 塚・法寺岡 地内	36度 09分 29秒	136度 31分 47秒	1次20080730 ~20080823 2次20090803 ~20090822	約11,000㎡	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
手繰ヶ城山古墳 (松岡3号墳) 陪塚 (松岡4号墳)	古墳	古墳	前方後円墳 1基 方墳(陪塚) 1基	なし	手繰ヶ城山古墳の測量調査を実施した。その結果、2段築成で葺石と埴輪を備える約130mの前方後円墳であることが再確認された。くびれ部の片側には造出が付く。佐紀陵山古墳と類似する墳丘築造規格をもつと考えられることや川西編年Ⅱ期に比定される円筒埴輪から、古墳前期後半の築造と判断される。陪塚(松岡4号墳)は約27.5×24mの方墳である。	

2011年3月30日印刷

2011年3月31日発行

手繰ヶ城山古墳

-測量調査報告書-

編集・発行 富山大学人文学部考古学研究室
〒930-8555 富山県富山市五福3190
Tel076-445-6195

印刷 株式会社スカラファクトリー